

---

# 幻想の闇と光の彼方へ(釈迦の悟りについての対話篇的考察)

青山曜三

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想の闇と光の彼方へ（釈迦の悟りについての対話篇的考察）

### 【Nコード】

N5136N

### 【作者名】

青山曜三

### 【あらすじ】

今回はプラトンの対話編的な手法で「釈尊の悟り」について取り組むことにしました。難しいことを難しく書いたのでは能がないのでプラトンを見習うことにしたからです。ですが、プラトンのように長く書いたのではこれまた能がありません。退屈する方も居るでしょうし、インターネットに適しているとも思えないので短くまとめる所存でいます。「サザエさん」のように小学生にでも分かるように書ければよいのですが、やはり難しいようです。これは私の体験をもとに書いた釈尊の悟り観です。仏教の思想とは相容れないも

のですが、仏教を取り上げているわけではないので問題ないと思っています。

## 大いなる高原において

「きみは以前釈迦がなにを悟ったか知っていると云っていたね」

「ああ、そんなことならとつくのむかしから知っているよ」

「なぜそう言い切れるのかね」

「なぞを解いたからだよ」

「じゃあ、きみは悟りを開いた人なのかい？」

「別にそんなことは言っちゃいないよ、じじつ言った覚えもない」

「矛盾しているじゃないか」

「別に矛盾なんかしていないよ、まわりが勝手にそう思うだけさ」

「悟ったのに悟りを開いていないの？」

「たぶんね」

「ハハハ、じゃあ、けつきよく悟りを開いていないわけだ」

「そんなことはどうでもいいことだよ」

「どうして？」

「釈尊がなにを悟ったか知っていると訊くから素直に知っている  
と答えたままで、悟りを開いたのかという質問なら、分からんと  
答えるしかないからね」

「これじゃあ、まるで禅問答じゃないか」

「そうかね、おれは別にそう思わないが、きみがそう思うのならそ  
うかも知れないね」

そう言うと、広瀬は黙って空を見上げた。晴れ渡った九月の空がも  
ろ手をあげてわたしたちに微笑みかけていた。

「いい日だな、いい気分だ。きつと、清少納言が居たら喜ぶだろう  
な」

「『をかし』か」

「ああ、『をかし』だ。おれは清少納言が好きなんだ。あのみずみ

ずしい文章はいつ読んでも心が洗われるよ。ああいう女性むすめが居たというのは奇跡のように思えるね」

「国風文化に興味があるの？」

「むろん、大ありさ。日本が自力で奇跡を起こした時代のひとつだからね」

「奇跡？」

「そう、奇跡だ。だってそうだろう。十一世紀に女性が文化人として活躍していたんだからね。そんな国はおそらく世界ひろしといえども日本だけだろう。それもただ活躍してただけでなく『源氏物語』や『枕草子』といったメガトン級の傑作を生む出すレベルだったんだから驚きだよ。これが奇跡じゃなきゃなんなんだ。どうしてこんなことが起ったと思う？ 女性が仮名文字を使ったからか。むろん、これが最大の要因だろう。だが仮名を使ったからといって傑作を生み出せるとはかぎらない。おれはこの国の神秘的な力が働いていたとみている。歴史を紐解くと不思議なことがいたるところで起きていたことに気付くからね」

「たとえば？」

「そのひとつが仁徳天皇陵だよ」

「仁徳天皇陵？」

「ああ、仁徳天皇陵だ。あれが世界最大の墳墓であることはきみも知っているだろう。当時の人はべつに世界一の墳墓を造ろうと思っただけじゃなかったと思うんだ。ところが造ってみたら世界一だったんだよ。そしてその後もこの記録は抜かれなかった。日本がふつうにしたことが世界にとつては規格外だったことをこの事實は示している。島国はほかにたくさん在るのに極東のこの日本の中でこんなことが起きていたんだ。しかも望遠鏡や測量機があるわけじゃないのに前方後円墳という日本独自のカタチでね。あの手のものを造るとなると他の国から大量の奴隷を連れて来るのがふつうなのにこれをせず造ったわけだから検討もつかないよ。いわゆる『空白の世紀』に世界一の墳墓を造れるほど多くの日本人が居たとは

思えないからね。だが現存する以上造ったことを認めざるを得ない。どうだね？ 不思議とは思わないかね？」

「言われてみればそうだな、そんなふうに考えたことがなかったよ。ほかにどんなことがあるの？」

「大有りだよ。たくさんあってそのひとつひとつ話していたら顎が痛くなる」

「まあ、そう言わずにひとつぐらい教えてくれよ」

「そうだな。水稻農耕の件は日本の七不思議のひとつだろうね。おれも考えているが、よくわからない。水稻農耕がどこから伝わったと思う？」

「中国か朝鮮からだろう？」

「ところが違うんだな。南インドなんだ。これは大野晋という大学者によって証明されている事実なんだ」

「そんな話は聞いたことがないよ」

「まあ、そうだろうね、まだ完璧とはいえないから」

「どうして事実だといえるんだ？」

「言葉が通じるからさ。アゼとかクワとかコメといった水稻農耕の専門用語がその地方でも使われているらしい。それもひとつやふたつでなく風俗もあわせると何百もあるというのだからこれはただ事ではないよ。しかも母音にも共通点があり、風習にも似た点があるとなるとなんらかの接点があったことは否定できない。中国や朝鮮から伝わったのならかれらの言葉を使っていなければ不自然だろう。だがその事実はなくこの事実がある。問題はどっやって伝わったのかということと、これを伝えた人たちがどこへ消えてしまったのかという点なんだが、これまた検討がつかないというのが現状なのさ」

「ということは邪馬台国のはるか前の縄文時代に南インドからはるる海を渡って日本にやってきたインド人がいたということかい？」

「タミル語を話す人たちがずっと南インドに定住していたかはなんともいえないが、かれらから教わったとしか考えようがないだろうね。まさか逆ということはありえないわけだから」

「信じられないな」

「だから不思議なんだよ」

「考えられないよ、日本の存在さえ知っていたどうか疑わしいというのに、それを艇子船かなにかでえっさえっさと一路日本を目指してやってきたというのかい？」

「そこが不思議なのさ。まさか空を飛んできたわけじゃなからうから海を渡ってきたとしか考えようがないね。それも7000キロ近くある距離をだよ。さっきの仁徳天皇陵の問題にしてもなにか得体の知れない神秘的な力がこの国には働いているとしか思えないんだな、おれには」

「合理主義者のきみにしては感傷的なことばだね」

「そうかね、おれはきわめて合理的な見方だと思うがね。アリストテレスじゃないが『不動の動者』的な見方としてね。要はこの日本の神秘的な力をどうやって引き出すかということと、どうやってそういう国をつくるかということが大事だと思うんだ」

「でもこれだけではなんともいえないだろう。似たようなことはどの国でも多かれ少なかれあると思うし」

「じゃあ、江戸時代をどう思う」

「江戸時代？」

「そう、江戸時代だよ」

「江戸時代のどこが奇跡なんだよ」

「江戸時代は世界でも類例のない奇跡の時代だよ。だって、支配階級の武士たちより支配されている側の一般民衆の方が自由で満たされていたんだからね。こんな話は聞いたことがないよ。武士は食わねど高楊枝って言葉がたいがいの武士の姿で、商人や町人といった連中はこれを尻目に歌舞伎を觀たり吉原に行つて遊んでいたんだ」

「でも殿様はべつだろう？」

「殿様だつていっしょだよ。こんな笑い話があるんだ。明治維新になつてから廃藩置県をしたろう、このときから殿様たちは華族になつたんだ。そうしたらかれらは大喜びしたそうだ。これでやっと自

由にできる土地が手に入った！ はじめて自由に使える金が手に入ったぞ！ ってね。殿様でもこのありさまなら殿様以下の武士の生活がどういふものだったか察しがつくじゃないか。けっきょくどの藩も慢性的な財政難に喘いでいたから悪政を敷く余裕がなかったんだろっけど、それでも上に立つ者が黙って窮屈な生活に甘んじていたというのは、おれには奇跡としか思えないね」

「でも大名屋敷で贅沢三昧していたイメージしか湧かないけどな」  
「そういう色眼鏡で見ればそういうふうに見えるということだよ」

そう言うと、広瀬は目を細めて静かに高原の風景を見入っていた。まるでこの広大な高原の中に日本の不動の動者が泰然とたたずんでいるのを眺めているといった風情だった。

「で、なんの話だっけ？」

「釈迦だよ」

「ああ、釈尊ね」

広瀬はそう言うと、いつものニヒルな笑みを浮かべてふたたび天を仰いだ。

この日、わたしは今日こそこの変人から一步も退かないで釈迦の話を聞き出そうと心に決めていたのである。







## 一瞬一瞬のきらめきに魅せられて

「きみはさつきから釈迦のことを、釈尊、釈尊といっているけど釈尊というのが釈迦そんじの正式な名前なわけ？」

「釈迦族の尊氏そんじという意味で釈尊といっているだけだよ」

「じゃあ、ブツダは？」

「おれの記憶だと中国人が『仏陀』と書き表したのがその呼び名のはじまりだったと思うよ」

「なんかあいまいだな」

「そりゃあ、そうだよ、おれが勉強したのは大昔のことだからね」

「じゃあ、本名はなんというのか覚えてるの？」

「ゴータマ・シツダールタだよ。たしかヘルマン・ヘッセが『シツダールタ』という小説を書いているよ」

「読んだのかい？」

「読んだけど忘れたな」

「なんか心配になってきたよ、ほんとうに悟ったのかい？」

「おれはなぞを解いたといっているだけだよ」

「なぞって？」

「釈尊がなにを知ったかというなぞだよ」

「で、なにを知ったの？」

「たったひとつのことだよ」

「たったひとつ？」

「そうさ、だからほかのものは必要ないのでさ」

「極楽浄土も観音菩薩もかい？」

「ああ、すくなくてもおれにはね」

「それはきみが必要ないのであって、釈迦は違うだろう？」

「いや、釈尊もいっしょだよ。だって知らないんだから」

「え！ 釈迦は極楽浄土も観音菩薩も知らないの？」

「知らないよ。釈尊は、大日如来だって、弥勒菩薩だって、大仏だ

つて、お地藏さんだつて、経典だつて知らないよ」

「経典を知らないの？」

「知らないよ、自分で書いたわけじゃないんだから」

「ほんとかよ」

「勉強すればわかるよ。学者や坊さんはみんな知っている既成の事実だよ」

「じゃあ、日本の仏教はどうなるんだい？」

「文字通りの仏教だよ」

「だっていま釈迦はなにも知らないようなことを言っていたじゃないか」

「だから『仏の教え』という意味で仏教なのさ。先人たちは釈尊が語った言葉を集めたんだよ。そしてそれらにさまざまな解釈を試みたのさ。だから分裂も起こったし、多くの経典や律が生まれたわけだよ」

「ようするに言葉の解釈論というわけかい？」

「まあ、そうだね。寺を建てるには金が要る。教団を維持するのにも金が要る。教団を大きくするのも金が要る、わかるだろう？」

となればどういった教えを説くかも察しがつくじゃないか。金に成らない教えじゃでかい寺は建てられないからね。この教えが欲を滅する釈尊の教えと一緒にいいことばかりだったことだよ」

「じゃあ、仏教じゃないってことかい？」

「いや、これが仏教なのさ。これが仏教だからこそ生きながらえてきたんだ。多くの矛盾を抱えながらね」

「でも釈迦の教えと違うんだらう？」

「でもそう悪くともものでもないよ。人はだれでも自分を表現したいという欲求を持っているんだ。だれもが多くの人に自分の考えを知って欲しいと願っている。この思いを否定するのは罪だよ。たとえ釈尊がなんと言おうとね。要するに仏教は自己主張や自己表現の場を世に提供したという意味で尊いのだ。釈尊がなにを悟ったかわからなければだれでも自由に話せるからね。その好例が大乗仏典の

如是我聞だよ。わたしは釈尊からこう聞いたと行ってから話が始まるだろう。こう言わなければ収まりが付かないからだよ。他人の考えを拝借しているわけだから本人から聞いたと言えれば聞こえがいいからね」

「じゃあ、釈迦の教えって何なの？」

「まず次の三つの基本が大事だよ。」

- ・形而上学は説かない
- ・修行をするな
- ・知恵を使え

これが最古の経典といわれるものからおれがピックアップした真の教えだよ」

「形而上学ってなんだい？」

「あの世のこととか輪廻転生といった抽象的な概念を普遍的に扱う学問のことだよ。ほかに占いや、神や仏といったものも含まれるだろうね」

「そんなこと言ったら日本の仏教はどうなるんだよ」

「全滅だろうね」

「じゃあ、一生懸命修行している坊さんたちはどうなるんだ」

「そんなことを言ったらって本家本元の釈尊がそう言っているんだから仕方がないじゃないか。じっさい釈尊自身も苦行したけど駄目だったんだよ。苦行したけど埒が明かないからやめちゃったのさ。それで菩提樹へ行ったんだ。そして菩提樹の麓で悟ったと言っているわけだよ。自分がやって駄目だったことを他人に薦めるわけないだろう。だから知恵を使えと教えているんだよ」

「じゃあ、修行しても意味がないということかい？」

「苦行と修行をどう捉えるかによるけど、おれはあまり賛成しないね。だって身の安全な寺や森で戦ったところで高が知れているじゃないか。それに修行という言葉に酔っている気がするしね。おれな

ら社会の中で働きながら独学でやることを薦めるね。だれも助けてくれないとなればそれこそ必死になって知恵を使うからね。それから習わなければやれないというのは話にならないよ」

「そんなことをしたら一生かかっても解けないかもしれないよ」

「だからいいのさ。悪魔のささやきが大いに聞こえるからね。これを仏教では煩惱というのかな、はつきりしないけど。でも悟ろうというのだから大いにけっこうじゃないか」

「きみ自身はどうなの？」

「むろん、実践したよ。きつかったけどね」

「それって、きみが何歳いくばくの話なの？」

「二十四のときだよ」

「そんなに若く！」

「疑うならおれの背後霊に訊いてくれてけっこうだよ。とはいっても、おれはそういうものを信じていないけどね、アハハハハ」

そう言うと、広瀬は何食わぬ顔で高原に目を向けた。高原は眩いばかりの緑をたたえて輝いている。一瞬一瞬のきらめきがその緑の前で静かな音を立てて砕け散っていた。真言、そんな言葉が聞こえたようにも思う。ミュージズの仕業だろうか。わたしは広瀬が気を取り戻すのを待ちながらこの神秘的な体験に心を奪われていた。



## 梵天と帝釈天が飛び交うなかで

「ところできみはキリストのことはちよくちよく話すけど、釈迦のことは話そうとしなかったね、なにか理由があったの？」

「うんざりしているからさ」

「うんざりって、なにを？」

「凄いことを悟ったと勘違いされていることにだよ。やれ涅槃だ、やれニルヴァーナだ、やれ悟りの境地だといって羨望の極みのように思われているからね」

「だってそうなんだろう？」

「別にたいしたことを悟ったわけじゃないよ」

そう言うと、広瀬はいったん言葉をきつてからふたたび話しはじめた。

「『仏伝』を読むと、悟ったのち、釈尊は『わたしがさつたこの真理は深遠で、見難く、難解であり、しずまり、絶妙であり、思考の域を超え、微妙であり、賢者のみよく知るところである』と語っている。だから人に話したって理解できっこないし、疲れるだけだから説教したくないと言い出すわけだ。そこへ梵天がやってきて、世のため、人のために立ち上がってくださいと拝み倒されて重い腰を上げたと記されている。だが、どう考えたって『仏伝』のこの言葉はおかしいだろう？ 思考の域を超えたことをどうやって理解するんだよ。それに知恵を使えといっていることも矛盾するしね」

「それをやってのけたから凄いんじゃないの？」

「やってのけたって、なにをやってのけたんだよ」

「だから悟りだよ」

「どうやって」

「どうにかしてやったんじゃないの、だから偉大な人物として崇め

「られているわけだから」

「宗教体験という意味で捉えているわけ？」

「まあ、そういう捉え方もできるだろうね。だって宗教なんだから」

「いい線いっているけど、正確には違うと言わざるを得ないね」

「なんで？」

「宗教の『宗』は真理を意味する概念なんだ。ということは、宗教とは『真理の教え』という意味になる。これを体験と結びつけて考えると、理解できない体験は宗教体験とはいえないことになるよ。悟ったという以上理解したにちがいないからね」

「後になつてから理解したということもありえるじゃないか」

「だがそれは伝説と矛盾するよ。釈尊は曙の明星を見て悟ったといわれているからね。きみの言う意味だと、明星を見て驚いて、あとになつてから意味を理解したことになるだろう？　だが『明星を見て悟った』という以上その場で悟ったはずなんだ。要するにニユートのりんご体験的な体験を釈尊もしたということだよ」

わたしは広瀬に圧倒されていたが負けなかった。

「じゃあ、どうすればいいんだよ」

「知恵を使えと教えているじゃないか」

「どうやって？」

「ヒントを見つけるんだよ」

「だから、どうやって？」

「なぜ説教するのを嫌がったか、きみは気にならないの？」

「その答えは凡人に話しても理解できないからだとさっき自分で言っただじゃないか」

「それは思考の域を超えたことを悟ったと信じている『仏伝』の作者の考えを代弁しただけだよ。それでいまこの考えの誤りを指摘しただけじゃないか。思考の域を超えたことは悟れないとね。釈尊がインスピレーションの泉のような頭脳をもっていたとしてもこの

考えは当て嵌まらないよ」

「じゃあ、ほかに理由があったというわけ？」

「むろん。ありうるだろうね、これが理由でないなら」

「そんなことがわかるのかい？」

「たぶんね。答えははじめに言ったとおり悟ったことが凄いことじゃなかったからだとおれは確信している。だから、言えなかったし、言いたくなかったんだよ。みんな凄いことでないと納得しないからね」

「じゃあ、釈迦は凄い人じゃないというわけ？」

「ちがうよ、釈尊はまさに雲の上の存在というに値するもの凄い人物だよ」

「たいしたことを悟ったわけじゃないのに凄い人なわけ？」

「きみは『悟った事柄』と『悟り』とを混同しているよ」

「え！ べつなのかい？」

「むろん、別だよ、この違いがみそなんだ。自分で解かないとわかりにくいんだけどね」

一瞬、わたしは大地が揺れたように思った。気のせいだろうが光洋とした景色が急に身構えてわたしに迫ってくるような幻覚に襲われたのである。

「なんか頭が混乱してきたよ」

「別にむずかしいことじゃないよ。一種の『なぞなぞ』のようなものだからね」

「なぞなぞ!？」

「そう、なぞなぞだよ」

「なんでなぞなぞが関係あるんだよ。関係ないじゃないか」

「いや、おれはけっこう的まを射た比喻だと思っけどね、学者や坊さんは怒るだろうけど」

「ますます混乱するだけじゃないの？」

「そんなことはないよ。要するにこういうことだ。なぞなぞというのは相手が答えを知っていることを前提とした遊びだろう？ 東京タワーを知らない人に東京タワーの質問なぞなぞをしたってわかるわけないんだから。だから東京タワーのなぞなぞをするなら東京タワーを知っている人を選ばなければならぬわけだ。釈尊の悟りもこれと似た試みなんだよ。つまり、釈尊は『ある命題』について考えていた。そして大いなる解決をしたと述べている。これを仏教では大覚成就というんだけどね、要するにこの体験が悟りだよ。だとすると、なぞなぞの答え、すなわち釈尊が『悟った事柄こと』はこの体験を引き起こした別の『何か』ということになるよね。大覚成就や悟りはこの『体験』を表現しているわけだから『悟った事柄こと』とは区別して考えなければならぬからね。ここまで理解できたかい？」

「なんとなくね」

「だとすると、釈尊は独りでなぞなぞをしたという見方が採れるよね。ある命題について自問して自答したわけだからこの見方が成り立つからね。ということは、釈尊はその命題の答えを『はじめから知っていた』わけだよ。なぜなら知らないことはその場で悟れないからね。東京タワーを知らない人がその場で東京タワーのなぞなぞを解けないのと同じようにね」

「なにを悟ったんだろう」

「極めて単純なことだよ、というより原始の極みといった方が適切だろうね」

「なんか難しそうだな」

「ゼンゼン、難しくもないよ。だって小学生でも知っていることなんだから」

「小学生でも知ってることなのかい！？」

「そうだよ、だから『真理』なのさ。釈尊しか知らないことがどうして真理なんだよ。人は真理を誤解しているよ。『人は死すべき者である』という言葉が真理と説く哲学者が居るけどこれは真理でなく事実だよ。死の意味が分からないのにそれを真理とすることはで

きないからね。仏教徒は釈尊の教えを真理として崇めているけど教えは教えであって真理であるはずがないよ。教えはその場の状況によって変えられるけどこの手の様変わりするものに普遍性はないからね」

「その答えには普遍性があるの？」

「当然だよ。この答えは、釈尊が生まれる以前の人たちも知っていたし、釈尊の時代の人たちも知っていたし、釈尊が死んでからわれわれまでの人たちも知っていたし、われわれも知っており、未来永劫だれもが知っていることだからね。子供でも知っていることを教えられて喜ぶ大人が居ると思うかい？ だから説教を躊躇したんだよ。事実釈尊は生涯『悟った事柄』にはふれていない。種明かしをすれば白けることを知り抜いていたからだろうね、おれのこの話みにたいに」

「じゃあ、なんで説教する気になったのかな」

「過程を重視したからだよ」

「過程？」

「そう、過程にね。というのは、子供でも知っていることだからといってバカにはできないよ。今すぐ解いてみると言われても解けないだろう？ だれもが知っていることというのは意味が深いんだよ。単純だが無限なのさ。想像がつかないという意味で無限なんだ。この試みはサハラ砂漠から一粒の砂金を見つけ出すような試みだからね。知っていることと言われても『何を』ということになるだろう？ この試みは突き詰めると、人間はなにを知っていて、どれだけのことを知っているかという人間の存在論と知識論にまで発展する究めて壮大でかつ深遠な主題となるんだよ。この意味で言うと、『仏伝』の『わたしがさとしたこの真理は深遠で、見難く、難解であり、しずまり、絶妙であり、思考の域を超え、微妙であり、賢者のみよく知るところである』という言葉も『思考の域を越え』という一点を除けば間違っていないよ。いずれにせよ、この過程を経なければ釈尊のいう意味での『悟り』はおとぎ話に過ぎなくなるだろう

ね

「釈迦つてすごい人んだな」

「そりゃあ、そうだよ。だてにイエスと比較されているわけじゃないよ」

「そうすると、仏教の経典を読んでも意味がないのかな」

「なくはないよ。ただ本で学ぼうとする人はすぐに体系にしがみ付こうとする点がネックだね。想像の砂漠や宇宙へ行かずに机上で知識を増やす安全策に固執して、安心してしまうからね。まあ、悟りうんぬんより、学者が坊主として大成するのが目的なんだろうから身の危険を冒す必要はないけどね。かれらは体系や勉強から解放されている点に釈尊の真の凄みがあることにまったく気付いていないようだよ」

「でも、きみは悟ったんだろう?」

「おれはずつと解いたといっているよ」

「けっきょく同じことだろう」

「おれが釈尊のコピーならね。でもおれはおれだよ、一個の男子さ」

そう言つと、広瀬はまたあのニヒルな笑みを浮かべながら静かに眩しい高原を眺めていた。







## 蘇った暁の明星

その後もいろいろ話し合ったが決定的なことは引き出せなかった。広瀬も釈迦同様「悟った事柄<sup>こと</sup>」にはふれたくないのか話をはぐらかしているように思えた。

「おい、お星様がもうお開きにしろって合図を送っているけどまだ続けるつもりなのかい？」

広瀬が指差す方向を見ると一番星が煌いていた。

「ぼくは納得するまでがんばるよ」

「もう、十分頑張ったじゃないか」

「まだじゆうぶんじゃないよ」

「でも、腹が減るし、クマが出たらどうするんだよ」

「そのときはそのときだよ」

「命懸けってことかい？」

「そう思っなら、そう思ってもらってけっこうだよ」

広瀬はこの言葉に気分を害したようだった。

「この手の話で命を粗末にするのは愚か者がすることだぞ」

「ぼくは命を粗末になんかしてないよ」

広瀬は途方に暮れたように空を見上げると、あのニヒルな笑みを浮かべて、

「おれは『星の王子様』にでもなったのかい？」

とつまらないことをいって普段の広瀬に戻っていた。

「よし！ できる限り話すことにしよう。クマが出たらそれはそれでおもしろい展開になるからね。ところできみは他になにが知りたいの？」

「釈迦の悟りだよ。決まっているじゃないか」

「物事には順序があるよ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ。ぼくは砂漠の真ん中に置き去りにされたままなんだからね？」

「そうだったらどうすればいいと思う？」

「分からないよ」

「まあ、そう言わずによく考えてみるんだ。ここが大事なところだからね。どうすれば砂金を見つけ出せるかじゃなくて、どうすれば助かるかをね」

「北極星を頼りに進むしかないだろうね、ほかに目印がないわけだから」

「そのとおりだよ。目印を探すんだ。そしてその目印を信じて進むしかない。同じようにこの問題の北極星を見つければいいんだよ」

「どこに北極星があるのか検討もつかないよ」

「なぞなぞのたとえを思い出すんだ。なにかが欠けているだろう？」

「なんだろう、思い出せないな」

「東京タワーのなぞなぞをするなら問題を出すのが先決だよ。問題を出さなければ始まらないわけだから。同じように釈尊の悟りを知るには釈尊が何について考えていたかを知ることが先決となるんだ。つまりこれが北極星の役を果たすというわけさ」

「悟りについて考えていたとばかり思っていたけど？」

「それは結果論だよ。始めからそうだったわけじゃない。四苦という四つの苦について考えていたんだ」

「四苦？ 四苦ってなんだい？ 聞いたことがないな」

「だから迷っているのさ」

「で、その四苦って何なの？」

「仏教では『四苦八苦』としてさらに四つの苦を加えて八苦として捉えているけど当初は、生、老、病、死、の四つの苦について悩んでいたと『仏伝』に記されている。要するに釈尊は『生・老・病・死』というこの人間の逃れられない定めというか悩みを解決せずに幸せだと思つて生きること、『ごまかし』と考えていたんだね」

「当たり前じゃないか。それが人間なんだから」

「でも釈尊はそういう人だったんだよ。この個性を認めなければ釈尊の悟りは分らないね」

「じゃあ、ニーチェの超人的な思想を抱いていたということ？」

「ニーチェ？ ニーチェと釈尊では『月とすっぱん』ほどの違いがあるよ」

「ニーチェだつて有名な哲学者だよ。そんなに違いが有るとは思えないな」

「ニーチェのどこが雲の上の存在なんだよ。まあ、ニーチェを崇拜している人にとってはそうだろうけどかれは基本的には学者なんだ」

「アインシュタインのような雲の上の存在のような学者も居るじゃないか」

「むしろ、居るよ。でもニーチェはアインシュタインじゃない。かれは早熟の異常な例だろうね。なぜか。超人という哲学が馬鹿げているからさ。はっきり言つて話にならないね」

「ぼくはよく知らないけど、そんなにひどいのかい？」

「何を言っているのか分かつていないのだから話にならないじゃないか。かれは、超人、超人、と天才主義をむきだしにして凡人を性悪説の権化のように烈しく攻撃するけど、おれに言わせればかれ自身が凡人なんだよ。だつて、『人間』と『超人』を二元論的に捉えて超人の優位を唱えているけど、その超人が『変身』を意味することなのか言及していないからね。人間が人間以外の者、超人に憧れるなら『人を超える者』でもいいけど、人間が人間以外の者に成れるのかというこの天変地異的な問題を抜きにしていくら大風呂敷を

並び立てても意味がないからね。人間が人間以外の者に成れないなら始めからこの着想は破綻しているわけで、こんな子供でも分かるようなことにまったく気付いていないのだから呆れるよ。実際、人間に生まれた以上『あの人はいい人間だった』と思われるように頑張つて、なぜいけないんだ。おれはそう思われて死ねれば本望だね。反論があるならいつでも受けて立つけど本人が居ないんじゃないやしょうがないね」

「きみがニーチェをそんなに嫌っているとは知らなかったよ」

「別に嫌ってはいないよ。何を説こうと勝手だからね。ただ釈尊と比較するのはナンセンスだという理由<sup>わけ</sup>をきみに知ってほしかっただけなんだ」

「でも釈迦とどう違うのか、まだよく分からないな」

「釈尊はただ悟ったと言っているだけじゃないか。正確には、『四苦』について考えて、大いなる解決をしたと言っているだけだよ。違いは明白じゃないか」

いつの間にか星の大群が夜空を埋め尽くしていた。わたしは広瀬が本気になっていることを知って恐れを感じたが負けなかった。

「じゃあ、四苦を解くしかないってことかい？」

「解かなければなにも始まらないだろう？」

「答えは小学生でも知っていることなんだよね？」

「小学生でも知っていることではなくて、真理と言ってくれよ」

「でも小学生でも知っていることだと言ったじゃないか」

「たぶん知っているはずだよ。最近の子供は妙にまかせているからね」

「それを自力で解けと言うんだろう？」

「その方がためになるよ。自分を信じきれなければ悟りはないからね。他力本願したって結果は見えているじゃないか」

「ほかに手はないのかな」

「だから大乘と密教が生まれたんだよ。多くの人を救うという崇高

な目的を掲げてね」

「たしかにその方が万人受けするだろうね。二―チエの超人と同じように」

「だが問題は『南無阿弥陀仏』と題目を唱えて救われた人が現実に居たかということだよ。きみは『南無阿弥陀仏』と唱えて救われたためしがあるかい？ この言葉の意味を知ってきみの願いが適うと本気で信じているの？ 別に「南無阿弥陀仏」でなくても「南無妙法蓮華経」でも「南無大師遍照金剛」でも構わないけど、これらの教えを一生かけて修業しても結局分らないなら一生を棒に振ったようなものじゃないか」

「棒に振ったかどうかはその人の気持ちの問題だろう？」

「自己満足すればいいということ？」

「しないより増しだろう？」

「きみは死ぬということを軽く考えているよ」

「どうして？」

「釈尊は悟ったから悟った者として死んだんだ。どんなに努力した自分に満足しても悟れなければ悟れなかった者として死ぬんだよ。

これでは今のきみと一緒じゃないか。仏教に一生を捧げて結果が出なければ何のための一生だったんだよ。それなら違う人生を選ぶ方が賢明で自他共にためになるじゃないか」

「でも『法華経』や『般若心経』を学んでいる人はそれらを修めれば本望のはずだよ」

「きみは釈尊の悟りについて知りたいんじゃないの？」

「そうだよ」

「なら、そういう人は関係ないじゃないか」

「どうして？」

「釈尊の教えと違う教えを学んでいるからだよ」

「どうして？」

「釈尊が禁じた教えを学んでいるからだよ」

「どうしてそう言い切れるの？」

「形而上学は説かないというのが釈尊の教えの基本のひとつだと始めに教えたじゃないか」

「『法華経』は形而上学にふれているの？」

「オンパレードだよ。形而上学を取ったらなにも残らないといっても過言じゃないね」

「それがそんなにまずいことなのかい？」

「死を軽く考えている証拠だよ。人はだれでもいずれ死ぬんだ。考えたくなくてもいずれ死を迎えるんだよ。死が分からないで済む問題ならいいけど、済まなかったときはどうするんだよ。悔いても悔やみきれない現実（死）が待ち構えているかも知れないんだよ。だからこそ釈尊はこの問題と真剣に取り組んだんだよ。そして悟った後も絶対に形而上学にはふれなかったのさ。いい加減なことはいえないからね。これを仏教では『無記』とか『毒矢のたとえ』と表している。あの世のことや死後のことはいくらでも適当なことが言えるから、『言うな！』、『ふれるな！』、と厳しく戒めた教えとしてね。適当なことを言って人の一生を台無しにする権利はだれにもないんだよ。度を越えた自己顕示欲は慎むべきだとおれは思うね」

「みんなそこまで深く考えていないと思うよ。株と一緒に結局は自己責任の問題なんだから」

「その考えは正しいよ。他人がとやかく言うことではないからね。ただ救われたいなら救われなければ意味がないだろうと言っているだけだよ」

広瀬はそう言うのと黙って遠くを見つめていた。

その先で流れ星が金色の尾を引いて颯爽と過ぎ去ってゆく雄姿が見えた。

「結局、四苦と自力で取り組まなければならないわけか？」

「悟りたければね」

「ぼくにはできそうにないな」

「その方がいいんじゃない。変人の仲間入れして苦しむよりも」

「きみはどうなんだよ？」

「おれは解いた者として死ぬことに満足しているよ。人がおれの言うことを信じようと信じまいと関係なくね。この違いは大きいよ」「どうして？」

「正当な区別があつてこそ平等だからだよ。無差別的な平等観は平等じゃないか。どうしてオレオレ詐欺をやったヤツとやらなかった者が死んでから一緒なんだよ。お金が欲しいことは皆一緒であり、お金が必要なことも一緒だよ。各自事情は異なるにせよ、この倫理は普遍だよ。事実子供でも悪いことだと知っている。オレオレ詐欺をしても捕まらなければそれで済むわけ？ 死んだらおちゃらになると本気で信じているの？ それならオレオレ詐欺をやらなかった人と変わらないじゃないか。むしろ得したと言つていい。こんなことがまかり通るのなら何のための一生だったんだよ。それこそだれでも好き勝手な犯罪をして強欲を満たせばいいじゃないか。でも人が好んで犯罪に手を染めないのは後で『やばいこと』になるのを本能的に恐れているからじゃないのかね。それをした事実永遠に消えないわけだから」

「それはきみの独自の思想なの？」

「そうじゃないよ。聖書ではこれを『最後の審判』と呼んでいる。正当な区別があつてこそ平等である、これが『最後の審判』の本意だよ。物事が二律背反で成り立っていることを思えば、この世の不公平さに対して死後の世界が正当な区別が立てられた平等な世界であることは自ずと推測できるじゃないか」

「なんだか怖くなってきたよ」

「何もやましいことをしていないなら恐れる必要はないだろう？ それともきみは陰で何かあこぎなことをしているのかい？」

そう言うと、広瀬は漆黒の高原に向かって笑いを爆発させた。わたしが慄然としていると、広瀬は、

「おれの考えを聞かない？」

と、探るような目で意外なことを尋ねてきた。

「なにを？」

「だからおれの考えをだよ」

「さんざん話してきたじゃないか」

「そうじゃないよ。いままでの話はいわば釈尊と仏教との因縁の話であつて、おれはただ釈尊の側について話してただけなんだ」

「有るなら話してくれよ、きみの考えとやらを」

「おれに言わせると、釈尊にしろ、仏教にしろ、難しく考えすぎていると思うな。というのは、これはきつと分かる時期が来ればだれもが分かることなんだよ。だつて、だれかに分かつて、だれかに分からないというのでは不公正じゃないか。この問題は人間の神秘のなぞに係わる究めて重要な問題なんだよ。悟りとは生と死のサイクルから居なくなる真理を獲得することだからね。これを仏教では解脱と表している。そして真理が万人共有の自己認識の鍵であれば、この鍵はだれもが持っているはずであり、だれでも開けられるはずなんだ。そうでなければ真理の概念や機能と矛盾するからね。」

確かに釈尊の言っていることは正しいよ。悟りを『原理』にまで高めたことは絶賛に値する。四苦はあくまでもかれの個人的（宿命的）な命題に過ぎないからね。だからこそ仏教は様々な教義を生み出して来たんだ。釈尊ほど本気で四苦と取り組む者が居なかったからさ。これはきみだつて同じだろう？ 四苦と本気で取り組みたいと思うかい？ 釈尊はこの命題（四苦）と取り組むために生まれてきた人だったんだよ。だからこそこの命題（四苦、宿命）と戦い、この宿命（四苦）に克ち、この宿命（悟り）について説き、そしてこの宿命（真理）を普遍的に捉えて原理化したんだ。自分の知るべきこと

を知って『成仏』するという突然変異的な奇跡をやつてのけたただけでなく、さらにこの体験を原理化するという二重の奇跡を独りで成し遂げたのさ。だからもう形而上学は必要なかったし、それまでの宗教とは似ても似つかぬものとなつてしまつたんだよ。体験は觀念に優るからね。でも自分と同じ人間は現れないし、居ないわけだから自分の体験を事細やかに語つても限界があることにも気付いていた。それで『四聖諦』を唱えたんだ。解脱の原理としてね。だれもが宿命を背負つて生きていくという見方に立つことで、四苦を個別化し、各自の命題を探求することで悟りが得られるというグローバルな考えを原理として打ち出したのさ。『四聖諦』はこのための四つの心得を普遍的に捉えた教えなんだ。『諦』が真理を意味する概念であることを知れば察しがつくだろう。形而上学を克服する救いの原理を発見したという意味ではこの発見は比類ない大発見といわざるを得ないだろうね。釈尊こそまさに超人なんだよ。

でもね、これをだれもが一代でできるかとうと、そうは行かないだろう。外圧や内圧など多種多様の抜き差しならぬ要因が奇跡的に重なり合わなければできないからね。この原理論は正しいよ。でもこれだけでは説明できないことがあるのも事実だ。その理由には『時期』が大きく係わつていとおれは思う」

「じゃあ、きみは分かる時期に来ていたということなの？」

「たぶんね、そうでなければヘンじゃないか」

「きみが解いたのは二十四だったよね」

「四苦を解いたのはそうだよ」

「その前に別の何かを解いていたわけ？」

「おれはおれの真理（宿命）を解いたよ。当然じゃないか」

「どんな？」

「それは言えないよ。でもね、だからこそきみにはきみの宿命を解いてほしいんだ。釈尊の教えもこれを意味するわけだから」

「キリストを解いたのはいつだったけ？」

「二十三のときだ。疑うならまたおれの背後霊に訊いてくれてけっ  
こうだよ。とはいってもおれはこの手の話は信じないけどね」  
「信じられないな」

「一度経験すればコツがつかめてくるということじゃないのかな。  
要は体験と経験だよ」

「あと時期もだろっ?」

「そう、時期も大切な要素だろっね」

「もう少し具体的に教えてくれよ」

「端的に言えば、おれの魂が古いということだよ」

「たましい?」

「そうだよ。要するに『時期』というのはこれだからね」

「それって形而上学だろっ?」

「そうだよ。いけないのかい?」

「だって釈迦は禁じていると言ったじゃないか?」

「でもイエスは説いているよ」

「どうして違うのかな?」

「しょせんアトバイスに過ぎないからだよ。それに考えていた命題  
が違うから違う現れ方をしているけれど悟った真理は一緒だよ」

「じゃあ、同じということ?」

「真理はね」

「じゃあ、何が違うの?」

「だから考えていた命題が違うといっているじゃないか。要するに  
高いビルの下からビルを見上げると『高い』と思うだろっ? とこ  
ろがそのビルの屋上から下を見下ろしても『高い』と思うわけだ。  
同じ『高い』でもこの両者には天と地ほどの違いが有るよ。真理が  
屋上で、命題が地面だとすれば、イエスと釈尊の教えの違いはビル  
のかたちが違うのと一緒であることに気付くじゃないか」

「そんな話は初めて聞いたよ」

「そうなの? あくまでもおれの解釈だけどね」

「魂にも違いがあるっていうこと?」

「そうとしか思えないだろう？ 子供でも大人の子が居れば、年取つても子供の大人が居たりするわけだから」

「それは精神年齢の問題じゃないの？」

「じゃあ、どうして精神年齢に差が出るんだよ。この差を引き起こす原因はどこから来ると思う？ 脳か？ おれは脳の専門家じゃないけど仮に脳の仕業ならなぜそのようなことが起こるのか証明してもらわないとおれは納得できないね」

「で、きみの魂は古いわけ？」

「インド人の占い師にそう言われたよ」

「占い師？」

「ああ。むかしインド人の占い師に占ってもらったときにそう言われたんだ。インド人の占い師って珍しいだろう？ それで気になつてその場で占ってもらったんだ。そうしたらおれの魂はおそろしく古いものだと言つて怖がつていたよ。これがおれの最後の生なんだと力説してね。この話が気に入ったんで信じているわけさ、アハハハ。でもこの見方は大事なことだよ。天才だからといって魂が古いわけではないし、凡人だからといって魂が新しいわけではないからね。人はすぐ天才と凡人という見方をするけど、魂が古いか新いかという見方を採る方が遥かに有意義で大切ことだと思うんだ」

「まさかきみが占いを信じているとはね？」

「当然じゃないか。占いというのは統計学なんだ。おれは古代インドやバビロニアの人たちが夜空に輝くあの星を星だと知っていたことに恐れに似た感情を抱くね。しかもそれらの星が人の運命を握っているという解釈を採り、地球の周りを太陽暦か太陰暦に沿って自転していることまで知っていたんだからね、恐れ入るよ。太古の間がどうしてここまで知性の手を伸ばすことができたのか理解できるかい？ それに引き換え日本人は夜になると細かい光が夜空に点滅するとしか思っていなかったはずだよ。星だと思ふことの方が異常なわけだからきわめて健全な営みを続けていたわけだ。日本人が自力で文字を発明できなかったことを思うと、文字を使ってこんな

とんでもないことをしていた先人の能力を侮ることはおれにはできないね」

いつの間にか朝日が昇りはじめていた。長くて短い一夜だった。

「でも結局は自分自身を理解できなければ本当の意味での『悟り』は得られないと思うな」

「ついにきみはこの問題の核心に至ったよ」

「どうして？」

「きみは釈尊が自分のことを何と呼んでいたか知っているかい？」

「なんて呼んでいたの？」

「如来と呼んでいたんだ。如来の意味はなんだと思う？」

「如来という言葉は聞いたことあるけど意味は知らないよ」

「人格完成者という意味だよ。釈尊は自分のことを『人格完成者』と呼んでいたんだ。釈尊が人格完成者を名乗っていたのであればきみも不満はないだろう？」

「じゃあ、きみもその人格完成者なのかい？」

「それはきみの想像に任せるよ」

巨大な惑星のような明星が目の前に浮んでいた。

広瀬はその明星を認めるとあのニヒルな笑みを浮かべて暢気に手を振っていた。



















## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5136n/>

---

幻想の闇と光の彼方へ(釈迦の悟りにについての対話篇的考察)

2010年10月9日00時43分発行